

## 6月28日 年間第13主日 マタイ10章37～42節 イエスを伝える人、陰で支える人

今週も先週の続きですが、その間に「私が来たのは平和ではなく剣である」という厳しい言葉があります。それを受けて、宣教に向かう使徒たちに語られた内容です。

いま、世界中で平和を脅かす剣が振るわれています。教皇も平和を実現するよう、世界の指導者たちに強く呼びかけておられます。イエスは平和の主ではないのでしょうか？そこで今日の箇所からその意味も含めてイエスの教えをあらためて考えてみましょう。

イエスは「わたしよりも家族を愛する者はわたしにふさわしくない」と言われます。弟子の心構えであるともいえますが、イエスを信じるための心構えであるとも考えられます。たしかに弟子たちは家族を離れてイエスに従いました。一方では律法にも書かれているとおり、「父母を敬う」「家族を大切にすること」も正しいことではないでしょうか。

しかし、「子ゆえの闇」ということわざがあります。親が子を溺愛するあまり、物事の判断を誤ってしまうことです。裏口入学や縁故採用などはその例でしょう。逆に、親を大切にしすぎて夫や妻、子供さえもないがしろにすることもあるでしょう。さらに、それが神に対する信仰を妨げてしまうこともあるかもしれません。

あるシスターは修道院に入るときに父親に猛反対されたそうです。それでも振り切ってシスターになったら「勘当だ！二度と帰ってくるな！」と言われたそうです。しかし時がたつと、「修道服を着て帰ってくるな」に変わり、やがてはシスターの恰好で帰ることを許されたそうです。親とのいさかいを神さまが修復してくださったのですね。

もう一つ大切なことは、イエスは常に貧しい人、孤独な人を中心に考えておられたということです。家族のいない人、虐待を受けている子供たち、ひとり暮らしの高齢者に「家族を愛しなさい」と言っても意味がありません。先日、5月の刑務所の講話が母の日の週だったことから「聖母マリアと母の日」についてお話をしました。昔ならば「出所を待っているお母さんを悲しませないようにしましょう」とお話ししたかもしれませんが、聞いている人たちには家庭環境に恵まれていなかった人も多いはずで、それで、「この世に親がいなくても、親との関係が悪くても、天でマリアさまが祈ってくださっています」ということを話しました。思いは届いたでしょうか。

イエスは使徒たちに、そしてわたしたちに血のつながりを超えた信仰による家族のことを教えられたのだと思います。最後に言われている「水一杯でも飲ませてくれる人は報いを受ける」という言葉も、信仰における兄弟姉妹を表しています。迫害されている人に、そっと水を差しだすことは危険が及ぶ行為だったかもしれません。それはまさに心に剣をもたらすことだといえるでしょう。しかし、社会で、表立っては一緒に活動できなくても、陰で支えることもイエスの弟子の役割です。わたしたちも、この世で苦しみを受けている人に陰ながらでも、何かできることはあるはずで、

(柳本神父)